

ロシアにおける日本中世史研究

KURIMOHU, Wadim / クリモフ, ワディム

(出版者 / Publisher)

法政大学史学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政史学 / 法政史学

(巻 / Volume)

51

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

12

(発行年 / Year)

1999-03-24

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00011277>

ロシアにおける日本中世史研究

クリモフ ワディム

一 過去

日本中世史研究は日本研究の一部であるので、ロシアにおける日本研究史から始めたいと思う。ロシア人が最初に日本に関する情報を得たのは一七世紀の中ごろであった。一六七〇年、『宇宙誌』が刊行された。世界の主な国々に関する詳細な記述が載っていた。第七十章、「日本、(もしくは日本島について)」には、日本の地理的な位置、気候、動物―植物界、統治制度、産業、宗教、日本人の感情、習慣、日本人とスペイン人、ポルトガル人、オランダ人との関係などについての資料が載っていた。中には不正確な情報もあった。また一七世紀には初めてロシアの地図上に日本が表記された。ポリャコフは一六七三年に、イデスは二六九五年に、レメゾフは一六九九年にそれぞれ地図を作成して日本を描いた。製図師のレメゾフはアムール河口に相對する「島の日本島」を記載した。スパファリイは一六七五年に外交上の指令によって北京へ出張した。彼は中国の情勢だけではなく、インドと日本に関する情報を収集した。一六七八年、スパファリイはモスクワに戻り、旅行日誌と報告書の二つの文書を外務省に提出した。日本に関して、『宇宙誌』よりもいっそう信頼するに足る情報がもたらされた。

一六九五年、伝兵衛の乗っていた船が大坂を出て江戸に向かい、嵐に遭い、公海へ押し出されて、カムチャツカ半島南

岸で難破した。乗組員の中で伝兵衛しか助からなかった。彼は一七〇一年にまだロシアの首都であるモスクワに送り届けられて、「口述書」を記述した。初めて日本人から日本に関する資料が伝えられた。カムチャッカ半島に漂着した伝兵衛は一七〇二年一月八日、モスクワの郊外にあるブレオブラジェンスコエ村でピョートル大帝に謁見した。ピョートル一世の勅令によって伝兵衛は数人のロシア人に日本語を教えたという。時はピョートル大帝の改革の時代だった。ロシア人は外国と外国語に対して大きな関心があったから、日本語教育もその時代に始まった。

その結果で、サンクト・ペテルブルグに一七三六年、ヨーロッパにおける最初のロシア科学アカデミー付属日本語学校が開設された。ロシアだけではなく、ヨーロッパの最初の日本学中心地だった。一七三四年にペテルブルグにやって来た薩摩の二人ソーザ（洗礼を受けてから「クジマ・シュリツ」と名づけられた）とゴンザ（洗礼を受けてから「ダミヤン・ポモルツェフ」と名づけられた）は兵士の子弟に日本語を教え始めた。二人はロシア科学アカデミーに付属する日本語学校の教師になった。彼らの船が一七二九年にカムチャッカ沿岸で難破したのだった。二人はサンクト・ペテルブルグに来てからアンナ・ヨアンノヴナ女帝に謁見した。一七三六年九月にソーザが死亡した。一七三九年一月にゴンザが死亡した。ロシア科学アカデミー・東洋学研究所サンクト・ペテルブルグ支部の東洋学者の資料コレクション文書課にかつて二人の日本人が作った最初の日本語教材と露和辞書が保管されている。一七五四年からは日本語学校はイルクーツク市に移り、一八一六年まで続いた。

一八世紀・一九世紀初め頃は日本に関するより正確なロシア語による記述があった。これに大きな役割を果たしたのは、ロシア領域で難破した日本人乗組員と日本に捕虜となったロシア人やあるいは使節団のロシア人である。その内の大黒屋光太夫とアダム・ラクスマンはとても有名な人物だ。ラクスマンの書いた日誌は (13. IX. 1792-21. I. 1793) 日本に関するとても面白い研究書で、一八〇五年に出版された。一七九〇年四月、アダム・ラクスマンの父であるキル・ラクスマンは光太夫の手書きの日本地図をイルクーツクからサンクト・ペテルブルグにある科学アカデミーに送った。現在、あまり知られていない「日本と日本貿易について」という本は一八一七年にサンクト・ペテルブルグで出版された。著者は神昌丸の船長光太夫と一緒に助かった新蔵（キリスト教徒になってから「ニコライ・ペトロヴィチ・コロティギ

ン」と名付けられた)であった。彼はイルクーツク日本語学校の教師になった。一八一六年には、一八一一年から一八一三年まで日本に幽閉されたロシア海軍大佐ゴロヴニンの書いたロシア語による『艦長ゴロヴニンの一八一一、一八一二及び一八一三年の日本における監禁についての手記』がサンクト・ペテルブルグで出版された。一九六八年、東京でこの本の翻訳が出た。井上満訳『日本幽閉記』(岩波書店)。日本の地理、習慣、歴史、政治、宗教、農業などに関するとても面白い情報があった。日本に関する関心は一層高まった。当時ロシア政治の主な目標は通商関係を結ぶことであった。貿易はロシア経済発展のとても重要な刺激とみなされたから、貿易の必要性に対する日本研究が行われた。日本中世史に関してはあまり特別な関心はなかった。一三世紀のマルコ・ポーロの『東方見聞録』は例外だった。

一九世紀半ば頃、日本における鎖国時代が終わった。一八五五年一月二六日、最初の露日条約が締結された。日露関係史の第二段階が始まった。この時から貿易だけではなく、ロシア外交政策の必要性に対する実学的な日本研究が行われるようになった。日露条約を結んだブチャーチン使節団の中にはロシア最初の飛行機的设计者モザイスキイと有名なロシア作家ゴンチャロフがいた。函館の一九世紀の日常生活を描写したモザイスキイのスケッチとゴンチャロフの見聞記『一八五三年初頭から一八五四年末まで日本に滞在したロシア人』(サンクト・ペテルブルグ、一八五五、井上満訳『日本渡航記』岩波書店、一九六八)が日本に対するロシア人の大きな関心を引き起こした。その関心はロシアにおける日本中世史、日本文学、すなわち外交政策と貿易に密接な関係のない日本研究の基盤になった。主にこの時から研究論文には「日本学」と「日本研究」とを区別する訳ではなく、類語として使うようになった。ロシアにおける日本学は東洋学の学問の一つとして一八世紀半ばから一九世紀にわたって形成された。また最初のロシア領事ゴシユケヴィッチも日本研究に大きな貢献を与えた。彼は立派な一三四六冊の木版工および古版本、四七枚の日本地図を集めた。そのコレクションには地理、民俗学、歴史、ある程度の中世史、言語などの日本研究諸問題の資料だけではなく、日本の隣接国である中国と朝鮮の資料が含まれている。現在、そのコレクションはサンクト・ペテルブルグ東洋学研究所に保管されている。彼自身、アジア極東文化に関していくつかの論文を刊行した。

日本に関する関心がいよいよ高まり、日本語の学習がロシアでは切実な要請となってきた。一八七〇年サンクト・ペテ

ルブルグ国立大学東洋言語学部で日本語教育が始まるようになった。必須科目ではなく、選択科目だった。日本語科は未だなかった。日本外交官が主に学生を教えた。一八八二年、アレクサンドル三世の即位式に際して明治天皇の名代として有栖川宮殿下がサンクト・ペテルブルグを訪問したとき、日本語教育のことを知り、帰国してからサンクト・ペテルブルグ国立大学のために適当な本を集める指令を出した。一八八三年九月ごろ、約三五〇冊の日本書物のコレクションがペテルブルグ国立大学に寄付された。大学の教授会はそれに対し有栖川宮殿下に名誉教授の称号を授与した。コレクションは教育の基盤としてだけではなく、日本歴史、文化、宗教のさまざまな分野の参考資料になった。また一八九一年、ニコライ二世が皇太子であった時に日本を訪れた。この訪問は天津事件を引き起こした。ニコライ二世は沢山の土産を買ったが、この土産は日本研究者にとって貴重なコレクションになった。現在、このコレクションはエルミタージュ美術館とピョートル大帝の創立した民俗学博物館に保管されている。

一九世紀終わり、二〇世紀初め、ロシアに最初の日本研究者、通訳が現れた。日本語教育は選択科目だけで不十分であるのは明らかに、ちょうど百年前の一八九八年には、サンクト・ペテルブルグ国立大学東洋学部における日本学科が開設された。今年、百年記念祭を行っている。一九〇〇年、ウラジオストク東洋学大学における日本学科が開かれた。これらの大学の卒業者は日本文化、歴史、文学、宗教の研究に貴重な貢献をもたらした。

第一次世界大戦以前の日本中世時代研究の成果を挙げると『日本書紀』からの部分的翻訳、『竹取物語』の翻訳、『日本霊異記』からの部分的な翻訳、一八九六年、一九〇五年、一九一二年の『万葉集』の翻訳（ただし、ロシア人が慣れたリズムにあわず、日本の歌の特徴があまり感じられなかった）『古今集』、『新古今集』、『百人一首』の翻訳。特にここで注意すべきものはメーンドリンによる『日本外史』の翻訳である。また長崎のロシア領事（一八八四―一九〇一）であったコステイレフは一八八八年にサンクト・ペテルブルグで『日本歴史概論』を出版した。この論文には日本中世史研究も含まれていた。一八八八年には、彼はサンクト・ペテルブルグでイギリスの日本研究者チェンバレンの『簡略日本語文法』をロシア語に翻訳をした。ロシアの日本研究者は上手く研究を行うためには日本語知識だけではなく、科学分野で進んでいるヨーロッパ国々の言語知識が必要だった。

そして、日本研究者に対する基準が出来た。すなわち日本研究者は、①当然ながら、日本語の知識、②中国語、この言語はアジア極東文明の主な理解の手段であるから、③西洋言語（英語、フランス語、ドイツ語）、④深い教養、最高の文化的教育などの基本的な要求にかなうものだった。サンクト・ペテルブルグは貴族の都であったから、自由に英語、フランス語、ドイツ語で話す主に貴族出身の知識人は大勢いた。これが古典東洋学、東洋学の中に日本学ができあがるためのとても良い条件になった。サンクト・ペテルブルグはアカデミックな日本学研究のセンターになった。ロシアの人文・社会科学の高いレベルに基づいて日本研究も発展していくのであった。一九二二年、サンクト・ペテルブルグ国立大学中国・日本学部がコンラッド、ラミングに学位を与えた。ラミングは一九一七年九月までサンクト・ペテルブルグ大学で教え、その後外交官として日本に行き、後にベルリン大学（ドイツ）の先生を務めた。サンクト・ペテルブルグ大学から日本に派遣され、東京帝国大学を卒業したエリセエフは、一九一五年ペテルブルグ大学の先生になって、日本古典文学の研究を始めた。革命の後、フランスに亡命して、ソルボンヌ大学教授となって日本史と美術史を教えた。一九三四年に又アメリカのハーバード大学に招かれて、アメリカにおける日本学研究創始者の一人になった。ネフスキー（一八九二—一九三七）はペテルブルグ国立大学を卒業し、一九一五年から一九二九年までの一四年間日本に滞在し、日本語、民俗学、神道、アイヌの言語、伝承文学などの研究に従事した。レニングラードに帰り、東洋学研究所の研究員になったが、後に「日本のスパイ」として、日本人の奥さんと共に射殺された。七〇年代、死後レーニン賞を受賞した。ローゼンベルグは留学したとき仏教研究に従事してペテルブルグに帰って仏教に関する研究論文を書いた。この本はついに数年前に刊行された。一〇月社会主義大革命のせいでロシアの日本学は大きな損害を受けた。ロシアに残ったのはコンラッド先生だけになった。彼がロシアにおける日本研究者の祖とみなされている。

革命後、社会問題、階級闘争にたいする関心が高まった。代表的な研究論文の一つはE・M・ジュエーコフ「日本史・小論」である。この論文はマルクス主義に基づく研究で、正確に言えば、スターリン主義のアプローチがとても感じられる。革命後、外交官を除いて日本研究者は日本の大学に研修する可能性がほとんどなかった。革命前の教育を受け、古文書を読める研究者は少なくなった。学者の交流もなかった。恐らくこの理由で革命後の大学卒業者の日本中世史研究には

原本資料はあまり引用されていなかった。多数のソ連の日本研究者は日本の研究者の論文とヨーロッパ・アメリカの歴史家の研究に基づいて研究を行った。この時代には「ブルジョア社会の実績を新しい社会主義社会に役立てる」というスローガンの下に科学の様々な分野で研究が行われた。ある意味で、日本学も例外ではなかった。ボリシェヴィズム・イデオロギーの必要性に応じたレーニン主義思想の意義を偏重した社会研究、歴史研究、日本研究、特に二〇世紀世界史研究の時代が始まった。例を挙げるとジュエコーフは本庄栄次郎『日本社会史』（フェルドマン訳）から永享元年（一四二九）の播磨土一揆に関する資料（中山定親の日記『薩戒記』）を引用して「國中に侍をあらしむべからず」という表現の意味を間違って、解釈した。彼の書いた「日本史・小論」によると「國中」を「日本国家における」と了解して、反封建的な全国農民運動と考えた。しかしながら「播磨国」という意味で、播磨国の中で起こった土一揆であった。一九七二年にも別の本「日本軍国主義」にその間違いを繰り返した。もちろん、研究の間違いをしない学者は一人もいない。しかしながら、それはあの時代の代表的な誤りであると思う。研究者はイデオロギー思想にとらわれていた。その理由で原本資料に基づいて客観的な研究論文も書けなかった。それでも革命前のサンクト・ペテルブルグでの研究の伝統も続いていた。この伝統を続けたのはネフスキー、コンラドと彼らの弟子達であった。

第二次世界大戦の時、レーングラード（サンクト・ペテルブルグはボリシェヴィキ政党のリーダー、レーニンを記念してレーングラードと改名された）から研究員は疎開させられた。ファシスト軍隊に包囲されたレーングラードでベトロワ先生、その他の少ない学者が東洋学研究所の写本コレクションを保存した。戦争の時、日本研究者は主に中央アジアのタシケントに疎開したが、レーングラード国立大学の先生はヴォルガ川沿いのサラートフ市にいた。

戦争が終わってから疎開した学者がレーングラードに帰って、研究を続けた。その時代に大事な論文はジュエコーフの研究「農民に対する秀吉の政策——一六世紀における農奴制復活」（一九四六）が発行された。戦後、ロシア歴史家も活発にロシア歴史における農奴の役割、社会的地位、反封建的な闘争、農民戦争などの問題を討論した。一九五〇年夏には、東洋学研究所はモスクワに移されて太平洋研究所を吸収した。他の研究所に属する東洋学者もモスクワに結集した。コルホーズと同じように科学の分野にも学問研究の大企業のような研究所がソ連邦の政治的な要求に応じるために結成され

た。ただ古文書部はレニングラードに支部の形で残された。古典東洋学研究、すなわち中世の歴史、文化、文学、言語は古い伝統にしたがって文献研究が行われた。

一九五〇年以降、話題になったテーマは「明治維新の定義」と「日本歴史区分」であった。明治維新は「未完のブルジョア革命である」と考えられたが、レーニンの書いた日本に関する論文から出来た定義である。日本研究は他の人文・社会学の研究と同じようにイデオロギーの独占的な状況のもとで行われた。イデオロギーのコントロールは検閲によって行われた。

革命前のロシアにも、革命後のソ連にも、検閲が存在した。たとえ中世史研究論文であっても、前書きにはかならず共産党大会の決議と書記長の発表からの引用があった。もちろん、ソ連時代の論文にはレーニン、エンゲルス、マルクスの研究論からたくさんの引用があった。それはソ連時代研究論文の特徴のひとつであった。しかし、学者は本当に言いたい事をそれらの引用句のうちにかくして表現し、論文も印刷することができた。

戦後の国際情勢を反映して、日本経済の成長に伴って、現代日本の研究に関心が高まった。その成長の原因と前提条件を日本の過去に求めた。かつては一人の研究者が日本の全分野にわたって研究することも珍しくなかったが、この時期以降歴史・政治・経済・文芸などと研究が細分化され、各分野の専門家が育ってきて、日本研究者だけではなく他の東洋学研究の数多い研究所が出来て比較研究を実現する可能性が出来た一方、研究対象である日本そのものの複雑性から、必然的に各研究所の枠をこえた共同研究・比較研究・研究集団の結成なども盛んになってきた。最初に理論的な、哲学的なくつかのテーマが学者の注目の的となった。例を挙げるとアジアの国々の封建制の特徴、アジア的生産方法、アジアにおける土地所有権の形態、農民搾取・負担の形態、集団抗議の形態、反封建的な闘争の農民、すなわち中世時代の階級闘争の形態（主に五〇・六〇年代に積極的な闘争形態が研究された）、大衆運動に関連した大衆の宗教認識（しかしながら公式的な無神論のイデオロギーが大きな障害となり、「宗教は民衆のアヘンである」というイデオロギー的な解釈に基づいて中世社会状況、行動の動機付けなどに対する認識不足を見せた。この時代には、東洋の宗教の研究そのものが革命前と同じように客観的に発展することができなかった）、君主の権力の本質などであった。八〇年代には、共同研究テーマが

変わった。すなわち法律と日常生活と人間の世界に関係があるテーマがとても人気になった。

二 現状

その時代、六〇年代から、日本中世史研究は次のように大別することができる。①日本歴史一般研究（中世時代は研究の一部）、②日本中世史の問題別研究、③単独の一次資料の研究、④日本研究史、日本史学史、⑤偉大な人物の研究。

日本歴史一般研究。ゴールドベルグはレニングラード国立大学東洋学部の教授であって、東洋学部の他の教授と協力して『東洋諸国の歴史』という教科書を執筆して一九七〇年に出版した。パスコフは『日本の中世前期七—一二世紀』（一九八七）という本を刊行した。モスクワ国立大学のシリツィンとクズネツォフとナヴリツカヤは一九八八年に共著で『日本史』という教科書を出版した。イスケンデロフは一九八七年に『日本史と日本文化—古代から明治維新まで』という研究論文を刊行した。コンラドも日本中世時代に関する沢山の面白い研究論文を書き、特に注目を引くのはヨーロッパのルネッサンス期と比較する研究である。ヴィノグラードワは一九八一年に『三世紀から一四世紀までの日本彫刻』を、ニコラーエヴァは中世史に関する「日本文化と芸術」という論文を発表した。

問題別研究。イスケンデロフ：「一六世紀日本の封建都市」一九六一。スベヴァコフスキー：「日本の武士階級—サムライ」一九八一。ドーリンは武士階級に見られる人生観・宗教観などを分析し、さらにポポフと共同で『東方の武術—拳法』を出版した。山城国一揆についてコンラドとシヴェツォフは主に三浦周行の「戦国時代の国民会議」という論文に基づいて研究し、それぞれ一九七四、一九六四に成果を発表した。一向一揆に関する主に笠原一男の論文、特に「日本における農民戦争」に基づいてヨファンとシヴェツォフは研究の成果を発表した。クリモフは馬借一揆、徳政一揆、土一揆、山城国一揆、一向一揆、一四世紀・一五世紀の日中関係、勘合貿易などに関していくつかの研究論文を出版した。ユダヤ人のハーニン、少数民族差別問題に大きな関心があり、日本中世時代の差別問題を研究して、『日本社会における被差別者達の社会集団—一七世紀までの歴史の概論』（一九七三）を出版した。今、彼はアメリカに亡命して住んでいる。レシチェンコは『座』の諸問題をめぐって研究した。ヴォロビョーフとソコロワは共著で一九七六年に「日本における科

学、技術、手工芸の歴史の概論」を発表した。

日本研究史、日本史学史。ポドパローヴァ：「ソ連の日本史学史の五〇年間（一九一七―一九六六）」一九六七、「ソ連における日本学」一九七八、「日本封建制」一九八二。ポズニャコフは六〇年代、『アジアとアフリカの諸民族』という雑誌に日本中世史学史について面白い論文を掲載した。トルストグーゾフは自己資金で三年ほど前に日本中世に関する史学史、荘園、日本封建制の時代区分、日本封建制の特徴、その他の諸問題に関して本を出版した。シリツィンは荘園、公領、国衙領の問題について研究論文を発表した（一九八五）。

単独の一次資料の翻訳と研究。ポドパローヴァ：『御成敗式目』と『建武式目』の翻訳一九六三。クリモフ：『歴史資料としての日本中世百姓等申状』の研究と翻訳（一九八八）、『蓮如上人御一代記聞き書き』の翻訳（一九九三）。カバノフ：一休の『狂雲集』の研究と翻訳。近い将来に刊行される予定である。メセリャコフは慈円の生涯の研究と『愚管抄』の翻訳を発表した。クリモフは蓮如御文集を翻訳して、『六波羅殿御家訓』、『極楽寺殿御消息』、『竹馬抄』、『今川了俊制詞』、『伊勢貞親教訓』、『朝倉敏景十七箇条』、『早雲寺殿廿一箇条』、その他の武家家訓を翻訳し、研究論文を書いた。しかしながらそれらを刊行するのは財政的に困難となっている。

偉大な人物の研究。イスケンデロフ：『豊臣秀吉』一九八四。イグナトヴィチ：『日蓮―生涯と教義』一九八一。ステイネル：『一休宗純』。カバノフも一休上人と彼の狂雲集を研究した。ナコルチェヴスキーは一遍上人に関して学位論文を書いた。トロピイギナは『義経物語と日本中世文学におけるその役割』（一九八九）という学位論文で源義経の生涯のことを書いた。クリモフは蓮如上人の生涯を研究している。

八〇年代頃から、特にペレストロイカ導入の後、宗教・思想史に対する関心が高まっている。最初グレグリヤドは仏教に関する論文（『仏教と日本文化―七〇〇―二一〇〇年』）を出版した。次にカバノフは五山文学と禅宗について学位論文（『五山文学と日本文学史におけるその位置』一九八三）を書いて、禅宗に関していくつかの翻訳と研究論文を発表した。グレグリヤドは中世初期の仏教と神道の複雑な関係を研究した。メセリャコフ『古代日本へ仏教と神道―混合主義の問題』（一九八七）、イグナトヴィチの『日蓮―生涯と教義』（一九八一）、『日本古代時代の仏教』、『お茶の行事』（一九

八六)を出版した。その他、日本中世を研究するコンラッド、ゴレグリュアド、グリゴリエヴァ、スヴィリドフ(説話)、カバノフ(禅宗)によって日本の宗教に関する著書・論文が多数発表されている。ロシア人の禅宗への興味は大きく、この方面の研究は増えており、いくつかの鈴木大拙の研究論文などが翻訳された。

残念ながら、中世歴史に密接な関係のある学問的な意義がある論文が分かりにくい理由で適当な時に刊行されなかった。例を挙げると、六〇年代の一番面白い論文はポズニャコフの学位論文であると思う。その論文の印刷予定があったが、研究者が亡くなったあと印刷されなかった。旧ソ連邦でも、今のロシアでも、学者が研究論文を書き終えて、刊行するのに、時には一〇年、あるいは一〇年以上かかっている。恐らく、この理由で死ぬまでには間に合わなかったのだろう。ポズニャコフの論文は二冊しか残っていない。一冊はモスクワにある東洋研究所に保存されており、もう一つはモスクワにあるレーニン記念図書館に保存されている。ポズニャコフはそれでもいくつかの論文を発表する事ができた。この論文で彼は中世農民の一揆に関するロシアで初めてかもしれない面白い説を提供していた。蜂起の理由の一つは年貢、負担そのものだけではなく、その負担に対して農民の考え方も重要だとしている。また負担に対して以前の先例も中世時代の公正理想も重要だという。それにもかかわらず、ポズニャコフもレーニン主義の考えにとらわれて他の旧ソ連学者と同じ、「本当の味方と指導者となるブルジョア」とプロレタリアの社会階級が町に無かったから、すべての農民一揆は必至の失敗に終わったとしている。この結論は、ソ連邦の歴史家がどの国の中世農民運動史を研究しても共通するものであった。もちろん、中世封建社会にはこの社会階級は存在していなかった。さらに、農民一揆に参加した人達は新しい明るい搾取の無い社会を作り出すという目標などを全く考えていなかった。農民は徳政とその他の分かりやすい彼等の日常生活に関係がある要求を出し、完全ではないこともあったが、部分的に達成することもできた。だから、二〇世紀の学者の考える目標を持たず、自分たちの要求と目標を掲げれば、アブリオリに全ての農民一揆は決して失敗に終わらないだろう。だから、そのような中世階級闘争の解釈は史実に合わないと思う。この点から見れば、中世時代一般人民の考え方や思想史の研究はとても重要である。

それだけではなく、日本研究者はあまり日本に留学する可能性はなかった。例を挙げると私の大学院生時代の日本古代

史研究者であるヴォロビエフ先生は中国語も日本語も朝鮮語も英語もフランス語もドイツ語も読めたが、若いときに外国人と話す機会ほとんどなかったたので、発音を気にして、話せなかった。一回も外国へ行った事がなかった。日本研究者は文献も足りない。新しい本、日本歴史雑誌、研究論文、活字になった古文書などは大体日本国際交流基金、日本の知り合いのおかげで手に入る。したがって、時には、文献不足の理由で研究論文に間違いが生じる。ジュコフも『日本史・小論』で播磨国の永享元年（一四二九）土一揆に関しても間違ったのはその理由からかもしれない。

ロシアにおける日本学が始った時から、古典文学の研究、翻訳はとても盛んだった。中世歴史の重要な資料になっていると思う。中世の研究に関係がある日本古典文学の翻訳が刊行されたのは『万葉集』（ゲルスキナ・一九七二）、『枕草子』（マルコワ・一九七五、一九八三）、『竹取物語』（マルコワ・一九七六）、『落窪物語』（マルコワ・一九七六）、『方丈記』（コンラッド）、『伊勢物語』（コンラッド・一九七九）、『平家物語』（リヴォーワ・一九七九）、『大和物語』（エルマコワ・一九八二）、『祝詞と唱名』（エルマコワ・一九九〇）、『徒然草』（ゴレグリアド・一九七〇）、『土佐日記』（ゴレグリアド・一九八三）、『太平記』の断片的翻訳（ゴレグリアド）、『蜻蛉日記』（ゴレグリアド）、『古今和歌集』（ドーリン）、世阿弥の『風姿花伝』（アナリーナ）、軍記の研究（ボローニナ）、『日本中世の歴史物語』（ディアコノヴァの研究論文）、『源氏物語』（ソコロワニデリューシナ）、『日本霊異記』（メセリャコフ）である。メーリニコフは数年前にサンクト・ペテルブルグ国立大学の先生であって、現在同志社大学で働いていて、『更級日記』を翻訳、解説したが、未だ刊行することが出来ないでいる。

三 見通し―結論に代えて―

ロシアは日本研究の長い歴史を持つ。多数の研究者もいた。今度の経済危機の結果、学者の人数はとも減った。一九九〇年、サンクト・ペテルブルグ市に二八人の日本研究専門家がいた。ロシア科学アカデミーに付属する東洋学研究所サンクト・ペテルブルグ支部に一人、サンクト・ペテルブルグ国立大学に一〇人、国立文化アカデミーに一人、人類学民俗学博物館に一人、宗教無神論国立博物館に一人、サンクト・ペテルブルグ市にあるロシア科学アカデミー付属図書館に

三人、ロシア国立図書館に一人の専門家がいた。日本研究は主に東洋学研究所サンクト・ペテルブルグ支部に集中され、半分ぐらいの専門家が支部でさまざまな研究を行っていた。今年の秋、五人しか残っていない。そのうち一人が七〇歳を過ぎて、もう一人が七〇歳に近く、後の三人は四三歳から四九歳までで、大学院生は一人もいない。三人の内、二人が日本の大学で研修していて、一人しかサンクト・ペテルブルグ市に残っていない。もう一つ大きな研究、特に教育センターであるサンクト・ペテルブルグ国立大学東洋学部で一〇人の内から四人しか残っていない。大学院生は一人もいない。その主な理由は学者給料が恥ずかしいほど低いせいだ。

エルツィンがロシア大統領である限り、ロシアの経済が回復しない限り、ロシアもロシアにおける日本学も何の見通しも立たない。